



國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

31

國家圖書館出版社

六月四日

六月二日

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

31

第三一冊目錄

昭和五年（一九三〇）旅行日誌（第二十七期生）

柿田琢磨	第四十三卷		一
貴堂貞三	第四十四卷		五一
牛島俊作	第四十五卷		一〇七
天野治邦	第四十六卷		一七三
熊谷林之助	第四十七卷		二一一
島津真三郎	第四十八卷		二四三

粵漢鐵路沿線經濟

調查日誌

東京商工學院力三七年生

柿田琢磨

調査旅行日誌。

東京鉄道沿線遊歴記、柿田琢著

昭和五年五月

(序)

生等久松院、余を奉じて昭和五年五月二十九日より七月二日まで大旅行をなす。始め東京、後、鉄路沿線のお歴を企てたり。時、折々、又、峰を、初志を、中途にて線と変更するの止むを得ず。至つた。長沙、行つた。である。再び、海へ帰り、更めて、お歴、お歴へとお歴したのである。

初志に及するもの大いにあつたか、忽に角
大過なく此の行と終り得たやと
幸とする。

粵漢鐵路沿線經濟調查旅行日誌

廣東亞

五月十九日、木、晴、

午前十二時半院内出発。今日は天も私達の
内出を祝うて笑れるかの如く、朝かう好天気、
年末の山俗望も今日かう実現されるかと思ふと
どうも落付かない、心うと嬉しうその絶頂とひと
ふふとあう。小休の時、浮校で遊足かあると
ふふと別後かう山腹の小なれたものだ、丁度
其の称な時の多持にも似た気分なり。

一般学生の熱誠を込めた嵐吹りく、拍手。
累々竹、ニルばかりは心うと一生狂忘れようと
しても忘れるるの出来ない思ひ出の種の一つと

2.

なるであらう。嬉水もいしも又たうかしい旅で
ある。何年間か来しみに成つて来たものであつたと
思へば猶可いである。

「身体を大切に」を付けてね、うんと土着の話を
持つて来いよ、等々の別水の言を耳に受けた
時は何人となり、身うちか、何故か知らないが、
ぞくぞくして来た。

自動車で直ちに税関前まで行き、ランカに乗り
そくす、荷物一切を船に棄せてしまった。船は
浦東のN、K、K、碼頭から明朝午五時
出帆、十一時すぎに乗込んべい大船とのりて、
班としてもまた少しばかりの買物もあつたが
皆、又虹の方面へお替ける。

今日かう何日間かは面白いうちもあるだらうが、
 又苦しいうちも粗々あるだらう、そして又しばしば
 日本式のめしにも、余り好まれないだらうと
 云ふので、一つには班員一同の健康を祝ふため
 にビールを、又松路の安田館でスナック
 をついで、即酒造を一杯付けた、訳けで
 ある。実はその時の気分は私達でなければ味ふ
 るは出来なう、ありうと思へば、さうかに優越
 感を感じよう。さうこうしてあるうちに悔ひに
 も別水なければならなう。十時のランチ
 で、浦をへ返る。船は大福丸とか云ふ大い
 大くない船、而し、日清汽船の人の好むを
 三等のお客我々が、一等の特等を受ける。

4

おれ等々は、うれしい、感謝に堪へない所びある。
それでも書院のベツトより、はすくはしい。
もうすつかり夏だ、暑い、たし日暮い。日記を
書いてゐる手も冷んだかたうい。もう夕方夜も更け
たらしい。

五月三十日、金、晴、

船のドラの音に夢はやぶられた。思ひ出せは
五時出帆、おむい、きだ、何時もならまだく、
ベツトにゑんだ、柳になつてゐる、時だもの、
おしおてゐる、沢にも行かないで、起る。
上へし、けし、別れを告げよう、甲板へてゐる。
に梅はる、朝もやに包まれて眠つてゐる。
みんなに早朝早くに梅と見たりは始めてゐる。

二水が、久しくあこがれてゐた、大旅行の、一日目である。旅行らしい旅行を、たうの、な、私には
 二水かり、何日ゆか、何百里もの支那の奥地
 へ、苦行すべし、出掛けの、のであるかと思ふと
 船のドラの音にさへ、感傷的になりかちである。
 揚子江を上るは始めて、水、を、い、ひろく、と
 くら、水と、陸の線を、見る、だけである。出る、ま、
 すが、相、甚、当、苦、行、に、い、終、日、船、室、に、こ、も、り
 二瓶水を、耐、え、す。、さ、う、甲、板、に、出、て、み、る。水の、彼、方、に
 入、る、太、陽、の、美、しい、光、がある。

五月三十一日、土曜、曇、

六時、床、を、出、る。平、常、に、比、べ、る、と、仲、々、早、た、さ、の
 越、え、あり。、さ、う、を、へ、て、み、る、と、、刻、の、目、か、う、お、そ、

食ふ、
物、
起す
食ふ、
す
物。

夕色后甲被八出了。散步。离开。

船にあってしむる波の音を聞く。幽六想
口中おてみたりかあずりねむいとも感じない。
一時の次にたうた。おる。

木月一田人日人小雨後晴

午刻二時頃鎮江、十時南京、午刻五時
撫湖、通過、船長の帯により何処へも上
陸は許るべし、上つてみたかつたのだが、仕方
ない。

六月一日、日、小雨、後晴、

八時起床、朝食后又、カタイヘッドではあるが、
別にすゝもないが、もぐり込む。寝るゝ
か船中の退くつさを感ずる唯一の武器で
あつた。

午刻は、わづらゝにもあまたし、見る処もないが
揚子江に付いてしつてあみ。

長江は古来「江」と称し、其の源は青海に在
し、木曾島蘇と云ひ、四川省に在る金沙江、川江

湖北にては荊江と云ひ、洞庭湖の下流を
 長江又は大江と稱す。而して、長江、大江は其の
 流の終極にも用ひらる。現今も揚子江と稱
 せらるは其の下流に在る揚子より起るを云ふ
 もなり。全長は實に二千六百三十八里に達す。
 午後七時九江寄港、二時由停船、三十分ばかり
 上陸別に珍づかい、にも出逢はない。
 夜は甲板にて涼を取り、調査の事等に行き
 話をす。就寢十二時。

六月二日、月曜、晴、

七時半起床、船上のむし暑さ、甚しい。
 午後一時半漢口に付く、上陸と同時に
 四川班、陝西班の諸君にはからずも出逢ふ。

一時間の後には上へ向けて出帆とする。落付いて久し振りの話をする。ひまざへない。旅がある。

早々に阿蘇市に先輩訪問次に、日清義船へ。漢口におての調査を遂める方々束と先輩車、松尾氏宅にて相談する。教へて貰ふ。宿も同氏のお世話。西小路、福田館へ定めてもらう。学生たるか故に、おて、持てすけて貰って三食付二四五十支にしてもらう。なか、工賃な高しである。長い由の船旅だったのでも、水はた。バンドへ見物に出る。一寸見た所は上海のバンドにも似た様な感がある。町を歩くよりも出来ないので、早々に